

愛無き者に依つて醸せる悲劇

永代美知代

濱田榮子の死は、まだ年はのゆかない一少女の事とは云へ、己に人の妻となり、母となりした女性として、餘りに無意義な死と存じます。家を捨て、母を捨て、濱田家の息女でなく、たゞの榮子で以て愛へ野口氏に自由結婚をしたものならば、同棲後死に至る迄あしかけ四年間の年月に、たとへ幾度妊娠したつて何故に一度自ら家出した濱田家に行きて、籍をよこせの、財産がどうのと、そんな要求をしなればならぬ必要があるのでせう。それは誰しも富んでゆたかな家庭に、何不自由なく暮した身の、世間と云ふものにぶつかつて、目のあたり世帯の苦勞をしなければならぬとなると、今更のやうに金錢の必要な事も解ります。だが、併し、一度親にそむいて家出し、良人の愛にすがつた以上、どうもしかたがない。貧乏もし通し、産兒を庶子にもするがよいではありませんか、そして、それが如何にも嫌だ、愛へ野口氏の愛にいきるべくあまりに張合がないのな

ら、何故野口の家で自殺はしなかつたか、野口氏への遺書によると、申譯のための自殺とあるが、何をそんなに死んで申譯をしなければならぬのか。野口氏は財産を貰つて來なければ、籍をとつて來なければ二人の戀愛にひきかゝるぞよとでも申されたのか。兎に角榮子の死は間違つてゐると思ひます。其あまつさへ、濱田家に行つて亂暴をしたり、短刀を振り廻して母君をハラハラさせたしたりと云ふに至つては、實に言語にたえた行爲ではありませんまいか。此頃某女學校で以て、生徒に榮子の問題を課し答案をもとめた處、たいふ榮子に同情し、榮子の自由戀愛を讃美する傾きがあると同時に、未亡人たる母君の無理解を云々する者が多いやうでした。併し、榮子が野口氏との自由戀愛はよろしいが、同棲四年間濱田家へ對する態度、死の前後の行爲など、人の子としてとるべき道でせうか、果して又自由戀愛を敢てする程のもの、新道徳にかなつてゐるでせうか、私は世の女學生達の一考を要し度い。

其周囲の人々の所置及態度では先づ

第一に愛人野口氏から云はなければなりません。野口氏は榮子と倍も年が違つて居たとの事、十三四の頃から榮子と關係があつた云々は兎に角、榮子が野口氏の下宿に走つたのはまだ十五六かと記憶してゐます、とすると、自然周囲の人達から二人の戀を野口氏からしかけたもの、所謂野口氏が榮子をそのかしたものだ様に見られても仕方がない、かうして野口氏は何處までも榮子を導き、立派に二人の戀愛を完成しなければならぬ筈、年はの行かない榮子が、籍がほしい、財産がどうのといつたとしても其場合野口氏は榮子をといて貧に堪へ、濱田家の財産などに目をくれようより、二人で以て新しい努力で立派な財産を作らうとは何故云はなかつたか、日記によると、榮子をすゝめて濱田家へ行かせたり何かしらないけれど電話ではげましたとか云ふやうな文句をだいふ見受けるが、そんな風では周囲から

誤解され、現在血を分けた伯母たる未亡人から嫌がられるのも無理はない。私は榮子をして死に至らしめた責任者の一人として野口氏を擧げるにはばからない。そして榮子の死後、たとへ其遺書がどうあつたにしても、尾越辯護士を相手どつて、濱田家の内情を天下にあばくなど、實にどうも沙汰の限りである。

第二には母君、榮子が野口氏の下宿に走つた時、うす／＼二人の關係に氣がついてゐられたので、まあ／＼成行きにまかせ外はないとて、已にふだんぎ二行李迄とゞけて置かれたと云ふ以上、野口氏との同棲を默認してゐられるのだから、榮子が最初の妊娠をした時、尾越氏に計り、籍をやる事を極力主張されたらどうであつたらうか。娘の愛人として氣にくはないとは云へ、已に同棲して子まで設けてゐるなか、あとから戀がさめて悔いる日があつたら其時として、兎に角それまでの間全然夫婦にして入籍させ、榮子が貧に困つてひどく財産をほしがるの

なら、父博士の遺言で榮子にやる遺産はなくとも、自身自身の隠居料の半分でもさいて與へ度い旨を尾越氏に計つたら、尾越氏とて、それを如何斯何云ふ筈もあるまいし、榮子とて母の慈愛に感激し満足した事と思はれます。今度の問題で、はがゆくつて堪らないと感ぜられるのは此母君の態度です、尾越氏が一家の相談役であらうとも、榮子の母であり故博士の未亡人である母君が、テキとした主張をされたら、それを誰がこばみ得ませうか、私は今更母君の慈愛の程を疑はないではあらせん。

第三には尾越氏です、だいふ世間から非難されてお困りの様子だが、尾越氏がある新聞紙で發表されたものの中に、「榮子は恐るべき早熟で以て、已に十三才の頃から野口氏と情交があつた」と公言されてゐる、そして其すぐ續きに、「私達は榮子を野口氏からとり戻して、醫學士でも婿に貰ふ考へであつた」と云はれた。十三から野口氏と情交のあつた榮子と知つたなら、何故榮子の家出と同時に、未亡人を説

いて、親族を説いて、公然野口氏には嫁せしめなかつたか、濱田一家及尾越氏は何處までも舊道德を奉じ、新しい自由戀愛などめとめめとならば、日本女性の一番大切にする處の貞操を二三にして、榮子を他に嫁せしめるのは不道德ではないでせうか、兎に角尾越氏の申條は紳士としてあまりに下等なやうに思はれるのも残念です。

第四には榮子の従弟にあたると云ふ荒木富子とか云ふ女ですが、榮子の生前は兎も角、死後濱田家を訪れた新聞記者の群に對して、榮子の切つた疊建具を指示し、まだあちらにも澤山切つた疊や襖がありまゝ、今度の死も狂言自殺の間違ひです」等云つたと云ふに至つては、呆れてものも云へない、何故いちはやく榮子の暴行のあとをかくし、出来るだけ人目にふれさせまいとは心掛けなかつたか。要するに、榮子それ自身から周囲から愛と徳性が缺けての悲劇である。そして全然時代の惡傾向と云つて差支ない。